一学期の間、泣きながら、私に抱かれていたT子は、母親や先生、時々送ってくる近所のおばさんたちが、どれほど大変な思いをしているか、ひしひしと感じていたに違いない。しかし泣かないで幼稚園に来るというきっかけがつかめなかったのかもしれない。それが夏休みの間に『考えた』と表現されているが、二学期からは「やめよう」というひとつの決心を、子どもなりに夏休みがあったからこそできたのではないだろうか。

逆に日々連続する保育が続いている時には、保育者自身も、子どもを押し出してあげるきっかけをつかめないでいることが多いのではないかと反省させられる。もうその子どもが充分に力を貯えた時に、その子どもが一歩飛び立てるように保育者がきっかけをつくってあげなくてはならないのではないかと考えさせられた。

（茨城・竹園幼稚園）

おどりのなかの連続・不連続

石黒節子

第五回の舞踊公演〝桜雲〟を終えて、早や一週間たつ、そのときお祝いに頂いたあんなに美しかった色とりどりのバラの花が、日に日に色を変え、その美しさを失っていく淋しさが私は好きだ。ひとつのことが終り、過ぎ去っていくのをはっきりと感じとることができるからだ。そんな私が、昨春、桜に心をとらえられて、その思いを舞踊にしようとする過程で、まず、目にしたものは、梶井基次郎の「桜の樹の下には」と坂口安吾の「桜

の森の満開の下」であった。梶井の作品は、花の美しさは桜の木の根元に埋っている屍体の「水晶のやうな液」を吸い上げることによってでき上がるのだとして、死を抱きこんでいると考えなければ理解しがたい程の桜の美しさであるという狂的な花の見方だ。それに比べ坂口安吾の「桜の森の満開の下」では、山中に住む盗賊が、うばった美しい女を背負って満開の桜の森の下を通るとき、女が紫色の顔の大きな老婆になったと思って首を絞めて殺してしまう。気がついてみると、美しい女の屍体が横たわっていた、このときはじめて男は泣き、悲しみを知った。そして、やがては女も盗賊も降りつもった花びらのなかにかき消えてしまう、このラストは、いたく私の心をうった。ここでは桜のみせる生と死の世界が人を狂わせ殺人を犯させる。これら花のもつおもしろさは私をかきたて、以来古事記、伊勢物語、山家集、幾多の歌集を読むきっかけとなった。そして、これらを通して、花のもつ共通性、「美しさ」とその陰の「呪」が私の構想のはじめとなった。この時点で、昨春、桜をみたときの不安を納得することができたからだ。

しかしながら、これを踊りに構成するにはもうひとつ無理があった。日頃感じている文学と踊りの違いであった。そこで次の作業として、歌舞伎舞踊のなかで扱われている桜に関する台本を読みあさった。そのなかで、さき程の二点を満足させるのに近い展開が「関の扉」にみられた。ここでは少将宗貞と小野小町が美しい男と女として登場する。それに対して天下の大罪人大伴黒主とそれを悩ませる墨染桜の精の組合せで進行する。

これら舞踊の筋がきに道理性を追うのはむずかしい。舞踊の台本では思考の道筋を通らず、場面、場面が舞踏的に面白く展開される必要がある。つまり道理のある連続ではなく、エネルギーの強弱や、種々の情緒の伴う展開なのだ。そして一見不連続にみえるこの場面が、結末において「あー、そうか」と人を納得させるものが必要とされる。そこで、本質としてつかんだ桜の美しさと呪というコントラストを場面として生かしながら、舞踊的連続にしなければならなかった。具体的には、桜を代表

するような美女として数多く描かれている小野小町を登場させることにした。そしてそこに美し過ぎる故に実らぬ恋として、桜の性を代弁する役柄とした（桜の雌雄は同じ木の下で受精しても実らない習性をもつ）。この役は、東京シティバレエ団のソリスト吉沢真知子さんと中島伸欣さんにお願いし、そこに「空しい性」というタイトルを織り込んだ。それに対して、その花を盗む者として、ドラマチックな演技を得意とするモダンダンサー、五木田勲さんを登場させ、美しい花のような女を奪ったあと、桜の花の下を横切るとき、鬼女と勘ちがいして殺してしまうくだりを演じてもらい、これを花の呪とした。私は、桜の樹の精として登場し、運命を支配する、超人的存在を表すことにした。ここでは東洋の霊性を演技に織り込むのに苦心した。この美しい男女、それを破壊する盗賊、あやつる精を骨子として、花見、カラスを登場させ、楽しさ、笑いを織り込んだ。これらの場面はまさに不連続であった。そして終章において一気に、この不連続が意味をもち、観る人のなかで連続するよう心を砕いた。モダンアートの奇才といわれる高山氏をはじめ、多くのスタッフ、本学表現体育学専攻生の協力を得て、二日公演を無事、終えることができホッとしているところである。最後に本作品を通じて私の心に一貫していた句を紹介して結びとしたい。

この花の　下にて逢はば　かなしからむ

上田　晩春郎

（お茶の水女子大学）